

Support for **Woman** Doctors ～私からあなたへ～

「すべての出会いに感謝して」

吉村 裕子先生【東京都 25 期】
社会医療法人ましき会 益城病院
お子さんは小 6、小 2、6 歳、3 歳の 4 人



東京都 25 期の吉村裕子です。このたびリレーエッセイのバトンを頂くことになり、卒業後のことを思い起こしてみたいと思います。

大学卒業後、東京都立の総合病院にて初期研修を開始、2 年目のおわりに熊本県出身の同級生と結婚しましたが、すぐには同居せず 3 年目は東京・熊本それぞれで私は研修を続け、夫はへき地の病院勤務となりました。この 1 年の間に県や都の自治医大担当とその後のへき地勤務に関して相談させていただいたり、シュミレーションしたりもできたように思います。特に東京都は当時から都の担当者の中に卒業生の先輩がおられて親身に今後の勤務配置について検討・助言をくださったことが大きかったです。都道府県によって初期研修の年数からへき地勤務の長さ、後期研修の有無や方法も全く異なり、この『結婚協定』が結婚する他県同士の当事者のみならず、関係する多くの方々にとって非常に悩ましいものなのは当時も、今も同じですね。

私の場合、4 年日以降 3 年間は夫と共に熊本県でへき地勤務、その後は夫婦 2 人で東京に戻ってへき地勤務や後期研修のプランとなり、4 年目は熊本県山間部のへき地病院で勤務となりました。5 年目は海にほど近いへき地の小病院に勤めましたが、間もなく第 1 子の妊娠がわかりました。勤務病院の院長や県担当者にも色々配慮・検討いただいて、年度途中の 1 月に産前の休みに入ったタイミングで形のうえでは県庁勤務へ異動となり、その後は産後休暇に続けて育児休業として 6 年目 1 年間は仕事から離れました。7 年目からは予定通り、夫も一緒に東京に戻りました。東京での最初のへき地勤務は私(+長男)が山間部の小規模病院、夫は船で 5 時間ほど必要な離島と、お互い単身赴任のような感じで始まりました。当時は「1 歳の子供を抱えて、医者も少ないへき地の病院でど

うやって仕事と生活を両立させるのか？(できるのか??)」で頭はいっぱい、気持ちもいっぱいだったように思います。夫の両親は遠く離れ、自分の両親も少し遠くまで働いている…そのなかで何とかするためには公立の保育園で日中お世話になることを中心として、当直時の預かり先として市町村のサービスであるトワイライトステイ(乳児院での宿泊預かり)利用、病院関係者のご家族にあずかってもらう、ファミリーサポートセンターを利用するなどしていました。時には熊本から夫の母が泊りがけで手伝いに来てくれたり、週末は自分の実家に戻ったりもしましたが、この年に様々な子育て支援サービスを調べ、体験したことは、その後様々な人の手を借りながら子を育て働き続けるうえで重要なスタートになったと感じています。

その後も離島診療所に夫婦で勤務したり、熊本に戻って自分に残っていたへき地勤務 1 年を海辺のへき地中核病院で働きつつ、義務明けの直前 2 か月は第 3 子切迫早産で勤務していた病院に入院させていただいたり…。とにかくドタバタ、息子が 4 人に増えた今でもドタバタに全く変わりはないのですが、義務年限内を思い返すと特に熊本で初めてへき地勤務を開始したころから長男を連れてのへき地赴任が強く印象に残っています。

考えればその時の職場の上司や同僚だけでなく、子供にかかわってくださったすべての方、地域の応援、親兄弟の応援など数えきれないほどの人の応援があっはじめて、自分や家族は過ごしてこられたのだという感謝の気持ちでいっぱいです。現在は市街地の精神科単科病院で精神科医として勤務していますが、月数回はへき地の診療所などで精神科の診療もかかわらせていただいております。これからも細々とではありますが地域の医療に参加していきたいと考えています。

「自治医大卒業生 女性医師支援 NEWS」では、読者の皆様からのご意見をお待ちいたしております。特集記事のテーマ、絵本やその他のコーナーについても、ご希望などあれば、是非お寄せください。
連絡先:自治医科大学 地域医療推進課 卒後指導係
E-mail : chisui@jichi.ac.jp